

1

帰り道

名前

① あなたは、ふだんどんな帰り道を過ごしていますか。

② 「帰り道」は、どんな物語だと思いますか。

③ この單元では、どんな学習をしますか。

④ 学習計画を立てましょう。

時	学習活動	感想・ふり返り

2

帰り道

名前

● それぞれの場面で、「律」と「周也」はどんなことを考えていたでしょうか。

天気雨の後	天気雨の間	天気雨の前の帰り道	放課後の玄関口 ^{げん}	昼休み	場面	
					律	考えていたこと、心情
					周也	

「1」と「2」を比べて読みましょう。

1

放課後のさわがしい玄関口で、いきなり、周也から「よっ」と声をかけられて、どきっとした。

「あれ。周也、野球の練習は。」

「今日はなし。かんとく、急用だっつて。」

うわばきをぬぎながら周也が言って、くつしたにぼっかり空いた穴から、やんちゃやそんな親指をのぞかせた。

その指をスニーカーにおさめても、周也はなかなか歩きだそうとしない。どうやら、いっしょに帰る気のようにだ。

小四から同じクラスの周也。家も近いから、周也が野球チームに入るまでは、よくいっしょに登下校をしていた。なのに、今日のぼくには、周也と二人きりの帰り道が、はてしなく遠く感じられる。

もたもたとくつをはきかえて外へ出ると、五月の空はまだ明るく、グラウンドに舞う砂ぼこりを西日がこがね色に照らしていた。

「ああ、腹へった。今日の夕飯、何かなあ。あしたの給食、何かなあ。」

「な、律。昨日の野球、見たか。」

「夏休みまで、あと何日だったっけ。」

周也の話があちこち飛ぶのは、いつものこと。なのに、今日のぼくにはついていけない。まるでなんにもなかったみたいに、周也はふだんと変わらない。ぼくだけがあのことを引きずっているみたいで、一歩前を行く紺色のパーカーが、どんどんにくらしく見えてくる。

今日の昼休み、友達五人でしゃべっているうちに、「どっちが好き。」って話になった。「海と山は。」夏と冬は。「ラーメンとカレーは。」歯ブラシのかたいのとやわらかいのは。「みんなで順に質問を出し合い、「海。」「海。」「山。」「海。」と、ぼんぼん答えていく。そのテンポに、ぼくだけついていけなかった。「どっちかなあ。」とか、「どっちもかな。」とか、一人でごによごによ言っていたら、周也が急にいらついた目でぼくをにらんだんだ。「どっちも好きなのは、どっちも好きじゃないのと、いっしょじゃないの。」

先のとがったするどいものが、みぞおちの辺りにずきっとささった。そんな気がした。そのまま今もささり続けて、歩いて、歩いて、ふり落とせない。

返事をしないぼくに白けたのか、周也の口数もしだいに減って、大通りの歩道橋をわたるころには、二人してすっかりだまりこんでいた。階段をのぼる周也と、ぼくとの間に、きよりが開く。広がる。ここ一年でぐんと高くなった頭の位置。たくましくなった足どり。ぼくより半年早く生まれた周也は、これからもずっと、どんなこともテンポよく乗りこえて、ぐんぐん前へ進んでいくんだらう。

2

何もなかったみたいにするまえば、何もなかったことになる。そんなあまい考えをすてたのは、校門を出てから数分後、最初の角を曲がった辺りだった。どんなに必死で話題をぶっても、律はうんともすんとも言わない。背中に感じる気配は冷たくなるばかり。やっぱり、律はおこってるんだ。そりやそうだ。

昼休み、みんなて話をしていたとき、はつきりしない律にじりじりして、つい、言わなくてもいいことを言った。軽くつつこんだつもりが、律の顔を見て、重くひびいてしまったのが分かった。まずい、と思うも、もうおそい。以降、絶対にぼくの顔を見ようと思わない律のことが気になって、野球の練習を休んでまで玄関口で待ちぶせをしたのに、いざ並んで歩きだすと、気まずいちゃんもくにたえられず、またべらべらとよけいなことばかりしゃべっている自分分がいた。

「この前、給食でプリンが出てから、もうずいぶんたつよな。」

「むし歯が自然に治ればなあ。」

「山田んちの姉ちゃん、一輪車が得意なの、知ってたか。」

何を言っても、背中ごしに聞こえてくるのは、さえない足音だけ。ぼくがしゃべればしゃべるほど、その音は遠のいていくような気がする。

ふいに母親の小言が頭をかすめたのは、下校中の人かけがあっちへこっちへ枝分かれして、道がすいてきたころだった。

「周也。あなた、おしゃべりなくせして、どうして会話のキャッチボールができないの。会話っていうのは、相手の言葉を受け止めて、それをきちんとして返すことよ。あなたは一人でぼんぼん球を放っているだけで、それじゃ、ピンポンの壁打ちといっしょ。」

ピンポン。なんだそりや、とそのときは思ったけど、今、こうして壁みたいのだまりこくっている律を相手にしていると、その意味が分かるような気がしてくる。たしかに、ぼくの言葉は軽すぎる。ぼんぼん、むだに打ちすぎる。もっとじっくりねらいを定めて、いい球を投げられたなら、律だって何か返してくれるんじゃないか。

でも、いい球って、どんなのだらう。考えたとなんに、舌が止まった。何も言えない。言葉が出ない。どうしよう。あわてるほどにぼくの口は動かなくなつて、逆に、足は律からにげるようにスピードを増していく。

はあ。声にならないため息が、ぼくの口からこぼれて、足元のかげにとけていく。どうして、ぼく、すぐに立ち止まっちゃうんだらう。思っていることが、なんで言えないんだらう。ぼくは海のこんなところが好きだ。山のこんなところも好きだ。その「こんな」をうまく言葉にできたなら、周也とちゃんとかたを並べて、歩いていけるのかな。「どっちも好き」と「どっちも好きじゃない」がいつしよなら、「言えなかったこと」と「なかつたこと」もいつしよになっちゃうのかな。考えるほどに、みぞおちの辺りが重くなる。

市立公園内の遊歩道にさしかかったころには、ぼくは周也に三步以上もおくれをとっていた。もうだめだ。追いつけない。あきらめの境地でぼくは天をあおいだ。信じがたいものを見たのは、そのときだった。

空一面からシャワーの水が降ってきた。

もちろん、そんなわけはない。なのに、なぜだかどっさにプールの後に浴びるシャワーがうかんだのは、公園の新緑がふりまく初夏のにおいのせいかもしれない。

「うおっ。」
「何これ。」

頭に、顔に、体中に打ちつける水滴を雨と認めるのには、少し時間がかかった。晴れているのに雨なんて、不自然すぎる。ぼくと周也はむやみにじたばたし、意味もなくとんだりはねたりして、またたく間に天気雨が通り過ぎていくと、たがいのぬれた頭を指さし合って笑った。

本当に、あつというまのことだったんだ。ざざと水が降ってきて、何かを洗い流した。周也の気どった前がみがべたつとなつたのがゆかいで、ぼくはさんざん腹をかかえ、気がつくとき、みぞおちの異物が消えてきた。

単純すぎる自分はずかしくなつたのは、笑いの大波が引いてからだ。うっかりはしゃいだばつが悪さをかくすように、ぼくはすつと目をふせた。アスファルトの水たまりに西日の反射がきらきら光る。そのまぶしさに背中をおされるように、今だ、と思った。今、言わなきゃ、きつと二度と言えない。

「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。」
勇気をふりしぼつたわりには、しどろもどろのたよりのない声が出た。

「ほんとに両方、好きなんだ。」
周也はしばしまばたきを止めて、まじまじとぼくの顔を見つめ、それから、こっくりうなずいた。周也にしてはめずらしく言葉がない。なのに、分かってもらえた気がした。

「行こっか。」

「うん。」

ぬれた地面にさつきよりも軽快な足音をききながら、ぼくたちはまた歩きだした。

無言のまま歩道橋をわたった先には、しかも、市立公園が待ち受けていた。道の両側から木々のこずえがたれこめた通り道。人声も、車の音も、工事の騒音も聞こえない緑のトンネル。ぼくはこの静けさが大の苦手だった。

正確にいうと、だれかといるときにちんもくが苦手だ。たちまち、そわそわと落ち着きをなくす。何か言わなきゃってあせる。野球チームに入る前、律とよくいつしよに帰っていたころも、ぼくはこの公園を通りかかるたび、しんとした空気をかきまぜるみたい。ピンポン球を乱打せずにはいられなかった。律のほうはちんもくなんてちつとも気にせず、いつだって、マイペースなものだったけど。

そつと後ろをふり返ると、やっぱり、今日も律はおつとりと一歩一歩をききんでいる。まぶしげに目を細め、木もれ目をふりあおぐしぐさにも、よゆうが見てとれる。ぼくにはない落ち着きっぷりに見入っていると、とつぜん、律の両目が大きく見開かれた。

なんだ、と思う間もなく、ぼくのほおに最初の一滴が当たった。大つぶの水玉がみるみる地面をおおっていく。天気雨―頭では分かっていたながらも、ピンポン球のことばかり考えていたせいか、空からじゃんじゃん降ってくるそれが、ぼくの目には一しゅん、無数の白い球みたいにつつたんだ。

ぼくがむだに放ってきた球の逆襲。「うおっ。」と思わずとび上がった。後ろからも「何これ。」と律の声がして、ぼくたちは全身に雨を浴びながら、しばらくの間はたばたと暴れまわった。はね上がる水しぶき。びしょぬれのくつ。たがいのあわてっぷり。何もかもがむしようにおかしくて、雨が通りすぎるなり、笑いがあふれだした。律もいつしよに笑ってくれたのがうれしくて、ぼくはことさらに大声をほり上げた。

はつとしたのは、爆発的な笑いが去った後、律が急にひとみを険しくしてつぶやいたときだ。

「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。」
ほんとに両方、好きなんだ。」

たしかに、そうだ。晴れがいいけど、こんな雨なら大かんげい。どっちも好きってこともある。心で賛成しながらも、ぼくはどっさにそれを言葉にできなかった。こんなときにかぎって口が動かさず、できたのは、だまってうなずくだけ。なのに、なぜだか律は雨上がりみたいになえがおにもどって、ぼくにうなずき返したんだ。

「行こっか。」

「うん。」

しめつた土のにおいがただようトンネルを、律と並んで再び歩きだしながら、ひよつとして―と、ぼくは思った。投げそこなった。でも、ぼくは初めて、律の言葉をちゃんと受け止められたのかもしれない。

● 次の言葉を参考にしながら、二人の人物像を考えましょう。

たくましい	おおらか	おっとり	しんちょう	まっすぐ
落ち着き	おくびょう	おだやか	たのもし	明るい
活発	おっちょこちよい	あわてんぼう	おしゃべり	正直
マイペース	ひかえめ	気弱	消極的	積極的
				冷静

① 「律」の人物像を考えましょう。

・「律」から見た「律」

・「周也」から見た「律」

・あなたから見た「律」

・一文で「律」の人物像をまとめましょう。

② 「周也」の人物像を考えましょう。

・「周也」から見た「周也」

・「律」から見た「周也」

・あなたから見た「周也」

・一文で「周也」の人物像をまとめましょう。

